

『僕の家のお盆』

宮野 恵

「どれでもいい。何でもいいよ。」

「夕食決められないじゃない。」

母さんがとてもうるさい。だから何でもいいんだよ。

「カレーにするよ。いい。」

「だから何でもいいって。」

僕は何にも関心が持てない。習っていたヴァイオリンだって先月辞めた。好きだった野球のバットも物置いきだし、夏休みの宿題も全然進まない。ゲームはやるが楽しくは無い。何をするにもやる気が出ないんだ。

僕は三浦拓海。中学二年生だ。これからも何も面白くない人生を過ごしていくのだろう。ああ、そろそろお盆だ。明日はお墓参りか。面倒だ。本当に。

「どうしたら拓海は元気になるのかしら。」

「全く。いつまで惰気てるつもりなんだ。」

親はそう言うけど、治らない。心の傷は。

八月三十一日。多くの家庭では家族総出で忙しくしているであろうお盆の入り。この三浦家でもご多分に洩れず、朝早くから何やら忙しない様子だ。

「拓海っ。もうお墓参りに出発するぞ。」

父さんは僕に声をかける。彼は代々続くみかど屋という和菓子屋を継いでいて、この近所では少し有名な店らしい。僕が面倒くさがりながら車に乗り込むと、新盆の証である白提灯を尻目に父さんの車は走り出した。

車は一時間もするかしないかのうちに墓地へ辿り着いた。一面に敷かれた玉砂利を踏みしめながら、僕は我が家のお墓の前に立つ。

「何だよ。どうして・・・。」

お墓に来ると本当につらい気持ちに駆られる。

「あの事はもういいね。充分悲しんだろ。」

父さんが僕の肩に手を置くと突き放すように語りかけてくる。何だよ父さん。こんな冷たい人じゃなかっただろう。がっかりだよ。

墓前で父さんと母さんはやけに長い時間お祈りしていた。

帰宅。背中がムズムズする。何だろう。僕は玄関のドアを開ける。靴を脱いで家にあがろうとすると、父さんが

「拓海。塩でお清めをするんだぞ。」

と言ってくる。そういう父さんのちまちました性格が面倒に感じられる。こっちはお

墓参りで疲れたっていうのに。僕は玄関に置かれたお清め用の塩を手にとった。その瞬間。

「こんにちは、拓海君。」

知らない老人がそこに立っていた。それも三人も。誰だ。

「あの。どちら様ですが。」

「誰もいない所に向かって何を言ってるんだ。」

さつさとあがった父さんが訝しんで行ってしまった。え、父さんはこの人たちに気づいてないのかな。彼らは本当に誰なんだ。突然現れたし。それに体が若干透けてる気もする。幽霊なのかも。僕の手にはお清めの塩が握られている。この場合、やるべきことは一つ。

「とりゃあっ。」

僕は投げつけ・・・いや、投げつけようとした。

「早まるなっ。拓海っ。」

また現れた別の幽霊が大声で怒鳴ってきた。

僕は身をすくめる。その幽霊の顔は。

「ええっ。」

「拓海。いつまで玄関にいるの。こっちへいらっしやい。もうすぐ大野伯母さんが来るんだから。」

被せるように母さんが奥から捲し立てる。

「えっ、あ、分かったよ。」

返事をして向き直ると、そこに幽霊たちの姿はもうなかった。何だったんだろう。

落ち着け僕。一旦心を落ち着かせよう。

「この荷物、居間に運んでくれない。」

「何だよ手伝いかよ。いやだよ。」

面倒な仕事を押し付けてくる母さんをいなして、僕は部屋のある二階へ。

「最後の幽霊の顔。あれ、絶対そうだ。この前死んだ勝爺ちゃんだった。」

僕はぶつぶつ呟きながら自分の部屋へ。

「拓海。そこに座ってくれ。」

幽霊たちがいた。そしてその中心には勝爺ちゃんと思わしき人物。彼らからはなんだか凄い圧を感じる。いうとおりにはしないと何されるか。僕が気圧されて座ると、

「拓海君。わしは三浦正雄。」

「あたしは三浦きみ。よろしくね。」

「俺あ三浦米五郎。墓からついて来た。」

幽霊たちの自己紹介が始まった。

「そして私をご存じ、君の祖父の勝だ。この御三方も拓海のご先祖でね。お盆だから

やってきたんだよ。これからお盆の間宜しく。」

「早速だが、わしらはな。君にみかど屋を継いで欲しいのだよ。どうかね。」

正雄と名乗った霊がこう言う。

「そんなの分らないよ。」

そもそも話について行けない。何が継いでくれだ。正雄さんが食い下がる。

「お盆の間に決めてくれればいいがね。」

そして幽霊たちとの共同生活が始まった。

「拓海君、継いでくれるか決めたかな。」

「世の中は半世紀も経つと変わるものだな。」

「お供え物の卵焼きを頂くぞ。」

幽霊たちは正直騒がしい。いくらご先祖だからといっても馴れ馴れしすぎる。ずっと付き纏ってくるし。お盆だから親戚たちもすごい数訪れ、そして数時間雑談をして帰ってゆく。

「おじゃまします。」

誠二伯父さんがうちを訪れた。この人は。

「拓海君久しぶり。半年前のヴァイオリンの発表会ぶりだね。そういや期末テスト・・・。」

結構鬱陶しい。適当にあしたつていと、こんな事を言った。

「君にゲームを持ってきたよ。この前の誕生日プレゼントと思って受けとてくれ。」

へえ。叔父さんも、結構良いところあるじゃん。と思つたら、彼はカバンからゲームを出した。かなり古いやつだ。ケチツたな。

部屋に戻る。ゲームのせいで僕はため息。僕は自分のゲーム機を手取る。ゲーム機の機種すら違う。叔父さん全く分かつてない。

「これ、大輔が若い頃一緒にやってたな。」

「父さんとゲームで遊んだの。」

僕が投げ捨てようとする、勝爺ちゃんが、

「面白いからやってみると良い。これ用のゲーム機は物置にあるはずだぞ。」

すごい勧めて来る。爺ちゃんがそう言うなら面倒だが物置に行くか。

「あつたぞ拓海。これで楽しめるぞ。」

ゲーム機を見つけ、自室でゲームを始める。どうせ面白くないと思つて遊び始めると、勧めた本人の爺ちゃんが、

「敵はこう避ける。本当に楽しいな。」

幽霊だから透けててコントローラーは握れないけど、彼は一緒に楽しんでいる感覚らしい。こうしてみるとこれ、結構楽しいかも、

「拓海、ちょっといい・・・あら、楽しそう。」

部屋に來た母さんは微笑んで立ち去った。

翌日。今日のおやつはうちで作られた大福だった。我が家では倒産が作った菓子がおやつとして出されることが多い。父さんの菓子製作は我が家の自慢だ。そこで幽霊らが、

「おお、大福か。今も看板商品なのか。」

「そう。父さんが作ったんだ。」

「大輔のも美味いっちゃ美味いんだろうが。だが始祖である俺の菓子には及ばんな。」
米五郎さん。聞き捨てならないぞ。

「そんな事ないよ。父さんの大福も最高に美味しいよ。町では評判なんだよ。むしろ創業者の米五郎さんのよりも進歩した菓子だよ。」

僕は人が変わったようにムキになっていた。するとご先祖がニヤニヤしながら、

「今の発言は店への愛が感じられるな。」

「うん。和菓子って洒落てるわよね。」

「我が家を継ぐ気になったんだろう。」

ご先祖たちに一本取られた気がする。でも。

「和菓子屋、嫌いじゃないよ。」

僕にとつての家業って、何だろう。

部屋の隅のヴァイオリン。それにご先祖が目付けた時もあった。

「そういえば拓海はヴァイオリンをやっていたな。今はやっていないのか。」

「そんなの僕の勝手でしょ。」

「弾いてみてちょうだい。」

「それは楽器なのか。三味線に近いな。」

「みかど屋継げ。」

とてもしつこい。でも、これの習い事も辞めてから一ヶ月も経つ。腕が鈍っている。

「ご先祖様に聴かせる程の物でもないよ。」

「別にいいじゃないか。弾いてくれ。」

ここまで言われたんだ。まあ、弾いてやらないこともないかな。僕は下手でもしようがないよと念を押してからヴァイオリンを取りに行く。試しにバッハの曲を弾いてみる。

「上手いじゃない。誇っていい良いレベル。」

幽霊たちは口を揃える。もしお世辞でも、褒められたということが誇らしいし、嬉しい。北のこれまでの練習は無駄じゃないんだ。

その日の夜。

「拓海、夕食どうする。」

「ハンバーグをお願い。多めにね。」

母さんがちよつと驚くと、家事に勤しみ出した。夕食が出され、食卓に家族が集まる。
「手は洗ったか。」

「洗ったよ。そういや久しぶりにヴァイオリンを弾いたんだ。また始めてみようかな。父さんは何か言いたげな顔をしたが、話題に参加してきた。すると。」

「今日はやけに明るいな。どうしたんだ。」

「ええっ。元からだよ。」

突拍子もない事を言い出した。確かにご先祖と過ごしていると結構楽しかったりはするけれど。僕は夕食を早めに切り上げ、二階にある自室に戻った。

「拓海らしさが戻ってきたみたいね。」

「新盆で親戚たちも来てたし、気が紛れたんじゃないか。」

親はこう言うけれど。明るくなつたのかなあ。

部屋ではご先祖たちが待ち構えていた。

「ついに明日がお盆の最終日。明日の朝になったら我々は帰らなければならなに。」

「その前に拓海君の結論を聞きたいの。」

「さあ、継いでくれるか。」

しまった。さっぱり忘れていた。

「ま、まあ。明日の朝まで待ってて。」

返答したくない。引き延ばそう。すると。

「それでは我々の店に対する熱意をお見せしよう。まずはこの店の歴史から話そうか。」

正雄さんがこんな事を言い出した。やめてくれ。

「拓海君が継げば六代目になるわね。」

「何も話されずに継げと言われても決め難いからな。よし。まだまだたっぷり時間はある。いいから。和菓子屋のアピールはもういいから。さっさと切り上げて寝かせてくれ。」

その後、日付が変わった後も和菓子屋の話がされた。その後寝た時に見た夢は、忘れられないくらい悪夢だった。

そして朝。勝がひよんな事を言った。

「拓海に笑顔が戻って良かったよ。」

「どういうこと。」

え、幽霊までもが僕の性格を気にしてたの。

「もう拓海と会うのも最後の日だ。説明しておくか。あんな拓海。私以外の御仁らは君が店を継ぐのかどうかを気にして現世に出てきた。しかし、私だけは出てきた理由が違うんだ。」

「え。」

「大輔はこのところ拓海が元気がない事を心配して、仏壇やお墓で熱心にお祈りしていた。それに応えてやろうと私が来た。」

「そ、そうなの。どうろで僕に構う訳だ。」

「拓海。おまえは私が死んでからだいぶ落ち込んでいただろう。だからな。本当に良かったと思ってるよ。だがね、今日でお盆も終わりだ。またお別れとなってしまうんだ。だから今、約束してくれるか。これからも、今のうちに元気に過ごせると。そうしないと、お願いしてきた大輔らに顔向けできない。」

「そんな。お別れだなんて。でもそんな事言われても・・・。」

僕が狼狽えると、爺ちゃんが悲しそうな顔をした。亡くなった後も僕のこと気にしてくれているんだ。これ以上爺ちゃんに心配をかける訳にはいかない。期待に応えないとでも。そう出来ない自分が嫌でたまらない。爺ちゃんが生きていた頃の楽しさが脳裏をよぎる。

いつの間にか僕は泣き出ししていた。

「ううっ・・・。」

気づいたご先祖達が寄って来て僕を見守る。

「爺ちゃん、どうして。どうして死んじゃったんだよ。もっと一緒に居たかったよ。いつも店で忙しい父さんや母さんに代わって僕をいつも構ってくれてたじゃないか。」

「っ・・・。」

勝爺ちゃんはまっすぐ僕を見つめている。

「僕の前から急に居なくなっちゃうなんて。ずるいよ。僕はずっと言いたかったよ。『爺ちゃんありがとう』って。」

「こちらこそ、ありがとう。」

僕を見つめたまま、爺ちゃんはゆっくりとそう答えた。

「拓海はそう思っていたのか。私だって拓海に感謝しているよ。こんな最高の体験が出来たんだからな。そして。それだけ心情を吐露したんだ。すっきりしたろう。」

「う、うん。なんだか無理矢理抑え込んでいた心が軽くなった気がするよ。これから前向きに過ごせそうだよ。約束する。」

僕は爺ちゃんが死んでしまってから塞ぎ込んで、心を抑え込んでいた。しかし今は、本当に心が前向きになったみたい。開放的な気分だ。きっと僕だけじゃなくみんなも悲しかったはず。ここにいるのもう、前までの自分じゃない。

「そうか。じゃあみかど屋の件も前向きに考えるんだぞ。継げ。」

「しつこいなあ。分かったよ。考えるよ。」

ご先祖乱入。雰囲気ぶち壊しだよ。

「拓海。これから送り盆をするから降りていらっしやい。」

そこへ母さんの声。もうお別れか。でも、今度のお別れはもう大丈夫。

「はい。」